

原 著

投影樹木画法における  
枝のカウンセリング効果指標化に関する研究

大 辻 隆 夫\* 村 井 佳比子\*\*

The Study on Effective Indicators of Counseling  
through the Use of Branch-Drawings in the Projective Tree Drawing Technique

SUMMARY

The purpose of this paper is to make effective indicators of counseling by using branch-drawings in the projective tree drawing technique. Subjects are 47 participants of group-counseling. We compared and assessed the differences of their branch-drawings in the projective tree drawing technique before and after the counseling, and analyzed their utterances in every session by using STEP 4 (Scale for Therapeutic Evaluation of Personality 4 originally made by us based on Horney's personality theory, 1950). As a result, in six subjects were observed a great deal of growth changes in their tree branch-drawings and gained much significant insights of self-perceptual changes in the counseling process. According to the results, the growth change of branch-drawings were regarded as corresponding with personality growth, and concluded that branch-drawings in the projective tree drawing technique could be a useful tool for effective indicators of counseling and to check counseling process.

はじめに

投影描画法 (projective drawing techniques) における描画は、人間の表現形態としての行動と思考 (言語) の中間に位置づけられるものであり、自由連想法における言語を凌ぐ連想道具 (associative tool) としての機能を有しているとされ、夢と同様に患者の生活や治療の系列と文脈を理解する上で有用だと考えられている (Karp 1997)。中でも樹木画 (tree drawing)

は、原始的な水準に存在する、長期の、無意識の自己に対する感情を反映し、また、他の投影描画法に比して、より否定的な自己感情を投影しやすいとされ (Oster & Montgomery 1996)、さらにその個人の真の自己像 (veritable self-portrait) を表すものと考えられている (Hammer 1958)。特に枝については、枝の構成 (branch structure) が人格構造 (personality organization) のメタファーであるとされており (Cantlay 1996)、個人の成長や感知力 (perceived resources) を反映するものと考えられている (Groth-Marnat 1997)。

このように人格をとらえることに優れている樹木画は、その簡便性や情報量の豊富さ、親しみやすさ、短期間内における反復使用が被検者の負担にならないといった性質から、治療過程

\* 京都女子大学家政学部助教授 (児童教育学)  
Takao Otsuji

\*\* 相愛女子短期大学非常勤講師 (生活学)  
京都女子大学大学院研修者 (平成14年度)  
Keiko Murai

を検討するのに有効なものであると主張されてきた (Koch 1952, Buck 1948, Bolander 1977, Groth-Marnat 1997)。

しかしながら、これまでの研究を概観してみると、発達の研究や、あるいは精神病理的な兆候やトラウマが如何に樹木に表現されるかという視点に基づく研究が主となっており、人格の治療的变化、特に洞察 (insight) による人格の成長的变化に関する詳細な研究はほとんどみられない。

大辻・村井 (1998, 2003) の研究では、グループ・カウンセリング前後にバウム・テスト (Koch 1949) を実施し、枝に顕著な成長的变化がみられた者のカウンセリング場面における発言内容を検討した結果、いずれも自己および他者知覚の変化を伴う洞察的発言がみられ、枝の成長的变化がカウンセリングにおける人格の成長を反映するという示唆を得た。

以上のことから本研究では、グループ・カウンセリング前に比してグループ・カウンセリング後の投影樹木画法の枝に顕著な成長的变化が見られた場合、カウンセリング場面において洞察的発言がみられるとする仮説を立て、それを実証的に検証することによって、投影樹木画法の枝の変化がカウンセリングにおける人格の成長的变化、特に洞察による人格の変化を反映し、カウンセリングの効果指標として有効であるということについて検討したい。

## 方 法

**対象：**本研究では、自己探求および体験学習を目的とした2泊3日の宿泊形式による下記の2つの集中的精神分析的グループ・カウンセリングに参加した51名の内、グループ・セッションで発言のあった47名 (男性16名、女性31名、20~52歳、平均年齢34.6歳) を研究対象とした。参加者の内訳は、臨床心理士や教員、組織における相談業務担当者やカウンセラー、臨床心理学専攻の大学院生およびカウンセリング体験希望者である。

<Aグループ> 対象26名 (参加者27名中有発言者26名)、男性10名、女性16名、20~52歳、

平均年齢35.0歳、グループ・セッション計18.5時間、1999年8月13日~15日実施。

<Bグループ> 対象21名 (参加者24名中有発言者22名、内途中参加者1名を除く)、男性6名、女性15名、22~52歳、平均年齢34.1歳、グループ・セッション計17時間、1999年10月29日~31日実施。

**手続：**1. 投影樹木画法 (Buck 1948) をグループ・カウンセリング開始前・終了後、計2回、参加者全員に実施した。次に枝の変化について、量的変化をBuck (1948)、質的变化をBolander (1977) およびGroth-Marnat (1997)、不健康な指標の有無をOster & Gould (1987) およびCantlay (1996) を用いて分析し、その変化を4段階《変化なし(-)、何らかの変化が見られる(±)、成長的变化が見られる(+), 顕著な成長的变化が見られる(++))》で評価した。なお、教示にはBuck法の系列にある、より自由度の高いBolander (1977) の「木を一本描いてください」を使用した。<sup>(1)</sup>

2. グループ・セッションにおける発言をテープに録音し、参加者ごとに逐語録を作成した。次にその発言内容について、発言者にとっての重要な他者との人間関係にまつわる一連の問題意識と洞察を中心に分析し、「STEP 4 (Scale for Therapeutic Evaluation of Personality 4)」によって評価した。

STEP 4とは、筆者らがHorney (1942) の「精神分析過程の3段階」説にヒントを得て、さらに1段階を追加して独自に構成したものである。HorneyはClareの分析過程を利用して「精神分析過程の3段階」説を主張している。例えば第1段階は「神経症的傾向の認識 (recognition of a neurotic trend)」の段階、第2段階は「神経症的傾向の原因、顕在状態、結果の発見 (discovery of its causes, manifestations, and consequences)」の段階、第3段階は「神経症的傾向と個人のパーソナリティの他の部分との相互関係、特に他の神経症的傾向との関係の発見 (discovery of its interrelations with other parts of the personality, especially with other neurotic trends)」の段階としている。筆者らはこれに1段階を加えて構成したSTEP 4を用

いて、本研究の対象となる精神分析的グループ・カウンセリングの過程の分析を行った。

次に筆者らの精神分析的グループ・カウンセリングの4段階分析評価基準STEP 4の4段階と各段階の意味について、参加者の具体的発言例とともに下記に示す。(表1)

Step 1：自己の所有する問題の認識

Step 2：重要な他者との関係にまつわる自己の問題の認識

Step 3：重要な他者との関係にまつわる自己内部の矛盾の認識

Step 4：自己のパーソナリティの傾向に関する新たな認識

Horney (1950) は、精神分析過程では、個人

ようになり、最終的に自己の内部における相互に矛盾する諸傾向の存在を洞察するようになると述べている。また、この場合の洞察とは、知的経験 (intellectual experience) であるとともに情緒的経験 (emotional experience) であり、洞察が感情体験となる場合に、洞察それ自体が人格の成長的变化に寄与するとされている。STEP 4では、研究対象としたグループ・カウンセリングを主催するカウンセラーの立場が転移 (抵抗) 分析を重視する Langs (1971, 1972) らの精神分析的な心理療法に依拠することから、分析過程を重要な他者との関係にまつわる発言に焦点つけて評価することとし、個人が特定の状況における重要な他者との感情関係において新たに気づいた自己内部の矛盾した傾向を、自己のパーソナリティの一部であると洞察する段階を Step 4 とした。

3. 樹木画の枝の変化とグループ・セッションでの発言内容の変化を比較照合し、両者の関連の有無を検討した。

4. 参加者の発言内容と樹木画の枝の両者に顕著な変化のあった参加者を研究対象事例として抽出し、事例分析を行った。

## 結果

### 1. 樹木画の枝の変化について

研究対象とした47名の内、45名の樹木画の枝に何らかの変化がみられた。このうち顕著な成長的变化がみられたのは、A 4, A 13, A 17, A 24, B 2, B 7, B 13, B 14の計8名である。

### 2. 発言内容の変化について

研究対象とした47名の内、グループ・セッションでの発言に何らかの変化がみられたのは29名であった。このうち Step 4 までの顕著な変化がみられたのは、A 1, A 4, A 11, A 17, A 24, B 2, B 7, B 13の計8名である。

### 3. 樹木画の枝および発言内容の変化の比較検討

樹木画の枝とグループ・セッションでの発言のいずれかに顕著な変化が見られたのは、A 1, A 4, A 11, A 13, A 17, A 24, B 2, B 7, B 13, B 14, 以上10名であるが、このうち枝と

表1：STEP 4

	定義	発言例
Step 1	自己の所有する問題の認識	A 4 「期限を (守れないことが) 前から一あったんです」 A 25 「早く就職がね一決まったらと思ってるんですけどもね」
Step 2	重要な他者との関係にまつわる自己の問題の認識	A 3 「私は多分、母親と同じ人生を歩みたくないって思ってる」 B 7 「主人に対して、すごい怒りまくって、もう何か、コントロールできなくなって」
Step 3	重要な他者との関係にまつわる自己内部の矛盾の認識	A 1 「父と言えば一大嫌いだったんですけど、好きになりたかった」 A 7 「(母親に押し付けがましい言い方をされて) すごく嫌だったんですけど、なんか、心のどっかで、そういう嫌な言い方をする人間じゃないって一理想化した」
Step 4	自己のパーソナリティの傾向に関する新たな認識	A 1 「父親に気に入ってもらいたいけど、もらえなかったから憎い一だから男の人を怖がってるのがわかった」 B 13 「(人を) 出し抜くことで、親に満たされなかったことの代償を (得ようとしていた)」

が自己の内部の矛盾する感情を外部の状況 (例えば母親の性格) に帰属している状態から、特定の状況における自己内部の葛藤として自覚す

発言の両者に顕著な成長的变化が見られたのは、A 4, A17, A24, B 2, B 7, B13の計6名である。

### 事例検討

樹木画の枝とセッションでの発言の両者に顕著な成長的变化が見られたのは、表2および表3より、A 4, A17, A24, B 2, B 7, B13の計6名であるが、これらの事例を研究対象事例として挙げ、以下それぞれについて検討を行う。発言については逐語録にもとづいて、重要と思われる部分を抜粋し、ステップごとに記した。なお、発言中の( )内は、被検者(参加者)の発言の文脈を整えるために、カウンセラーの発言をもとに筆者らが補足した。

#### 事例1：A 4氏(35歳男性, カウンセラー)

表2：Aグループ26名 表3：Bグループ21名

	枝の変化	発言の変化(Step)
A 1	+	1-4
A 2	+	2-3
A 3	±	1-2
A 4	++	1-4
A 5	+	2-3
A 6	+	2-3
A 7	+	2-3
A 8	+	2-3
A 9	+	1-2
A 10	+	1
A 11	±	1-4
A 12	-	1
A 13	++	
A 14	±	2
A 15	±	2
A 16	±	1-2
A 17	++	2-4
A 18	+	2
A 19	±	2
A 20	+	1-2
A 21	+	1-3
A 22	+	1-2
A 23	±	1
A 24	++	1-4
A 25	-	1-2
A 26	±	1

	枝の変化	発言の変化(Step)
B 1	+	2
B 2	++	2-4
B 3	+	2-3
B 4	±	2-3
B 5	±	2-3
B 6	+	2
B 7	++	1-4
B 8	+	1-3
B 9	+	1-2
B 10	+	1-2
B 11	±	2-3
B 12	+	2
B 13	++	2-4
B 14	++	2
B 15	±	2-3
B 16	±	1-2
B 17	+	2
B 18	±	2
B 19	+	2
B 20	+	
B 21	+	2

【枝の変化】枝の構成が、未熟な段階から、より分化し、成熟した段階へと変化。(図1, 2)

【発言の変化】期限を守れないことと成長したくない自分を訴えていたが、期限を守るために必要な努力を惜しんでいたことに気づき、自分の能力を過大評価している自己のパーソナリティの傾向を洞察。

Step 1：期限を守れないことに対する問題意識

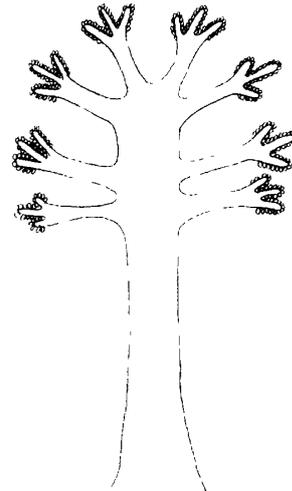


図1：A 4 pre-test

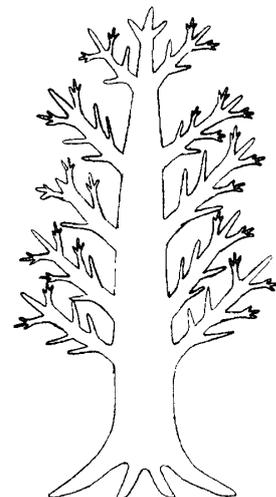


図2：A 4 post-test

「期限を(守れないということが)、前から、大学受験のときから続いてるんですけども、それ以前からもよくあったんですよ。」「ホントに自分が悪いんかなっていう気持ちもある。—(中略)—遅れる責任は、自分にはないと思ってるんですけど、—(中略)—そうじゃないような気がする。」「(期限に遅れても)自分だけ特別視してもらいたいという感じがある。」

「期限、その重要度が分かってなくて、で、先生に指摘されて慌てて、それがそんなに重要やったのかって、責任の重さを後で知って慌ててることがあるんですよ。」「母親に対してのイメージを、いつまでも修正したくないっていう気持ちがある。」「職場でね、上司がおって、嫌いなんです。最近なんか、優しい言葉をかけてくれるわけですよ。—(中略)—瞬なんか、ええ人かなって思ったんですよ。ええ人かなって思って、それがなんか許せんかったんです。」「もっと前の自分に対する態度をです—(中略)—謝罪してくれたら、なんかこちらです、ちょっと許そかなという気持ちはある。」「母親に対して、どうも似た感情があるんじゃないかと。」「自分を変えたくない(気持ちがある)。」

**Step 2**：提出期限に遅れたことを指導者に依存している自分との関係において検討

「(論文を書くにあたって) 問題意識なり、主体性なり、なんか、もちろん知識っていうのも欠けてたように思うんです。」「自分では最初、やる気がないと思ってたんですよ、そのやる気がないっていう意識の背後には、結局、こういう(代筆してもらって自分の業績にする)チャンスを狙ってたってというようなことかなって。やる気がないじゃなくて、やってもらいたい。」

**Step 3**：論文をうまく書けなくて期限に遅れたことに気づく

「(論文の提出について、最初は提出する気になかったけれども) 結局、あのとき(期限を過ぎても) 出す決意したのは—(中略)—(指導者から) 認められてんねんなあっていう感じをね、ま、持った。それで後のこと考えんと出して。」「はじめは出そうと思ったんです。でもうまく書けんからやっぱりやめようと思って。」「(自分の気持ちを言葉で正確に簡単に言える訓練をすることが) 自分の課題やと思います。」「(論文を書いたりするような、自分の能力を) 出すときに躊躇しますね。思いっきり出すっていうことに対する抵抗感っていうのが、出し惜しみしてしまうので。要するに、そこにそんなところのがめついの出て来るの

で。」

**Step 4**：自身の能力を過大評価していたことを洞察

「(話を短くまとめられないというのは) 性格分析うんぬんの問題で(考えるのは) 限界やなって。(知的な能力の問題もある。)」 「母親に対して、自分の主体性を損なってるように、損なわせてる母親に対して、ちょっとこう、怒りが出てきて、すぐ消えたんですよ。その感じが今までなかった感覚だったんですよ。」

「いろいろな人から指摘されて、やっぱ、もうちょっと人の話を聞けるようにはなりたいなあと。」

**事例 2**：A17氏 (37歳男性, 会社員)

【枝の変化】 枝の構成が、一次元枝段階から、二次元枝段階へと変化。(図3, 4)

【発言の変化】 妻に対する義母(妻方母)の

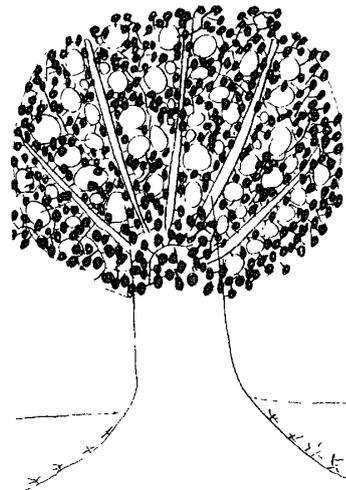


図3：A17 pre-test

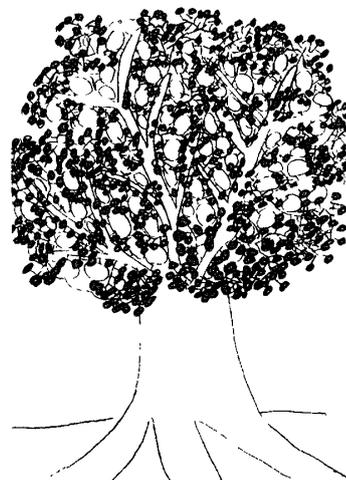


図4：A17 post-test

思いやりのない態度に対する憤りを訴えていたが、義母を恐れ、黙認していた自分に気づき、相手を打ち負かすことに固執していた自己のパーソナリティの傾向を洞察。

**Step 2**：義母の思いやりのない態度から妻を守れなかったことに対する問題意識

「(妻が流産で入院した後、家に帰ってきたとき) お母さん、お母さんって、子どもが話し掛けるわけですよ。その時に女房もちょっとしんどいので、おぎなりの感じというか、普段より違う対応をしてたんです。そこにお義母さんが加わってきて、で、子どもがせっかくお母さんて喋ってんだから、なんか、もっと愛想よく話をしたりとか—(中略)—もうちょっと何とかしいやってというようなこと言ってたんです。」「それ自体は間違ってる話じゃないんですけど、流産して、すごく辛いときに、なんかもっともらしいことをくどくど言われると、やっぱり嫌じゃないですか。あの、女房もさすがに切れて—(中略)—喧嘩し始めたんですよ。」「(こんな性格の母親を持っている妻が) 可哀想だなんて思ってたんですけども。」「僕自身は抗議するときって、全然知らん顔して無視するか、切れて(爆発的に怒りながら) 言うか—(中略)—(抗議の仕方の) バリエーションがないんですね。」「僕と女房の関係の中で、僕の役割として女房をかばってやらなきゃいけないのに、できてないんですね。—(中略)—いろんな介入の仕方があるのに、適当にその場を取り繕っちゃってるってところがあるんですよ。」

**Step 3**：義母を恐れ、黙認していたことに気づく

「(黙っていたということは、義母を正しいと) 認めたことになるんですかね。—(中略)—僕は全然そんな風に思ってなくても、結果的にはそういうことになっちゃうんですね。」「向こうのご夫婦(妻の両親)って、お義母さんが文句言っって、お義父さんが黙認するっていう。—(中略)—だからあの亭主はいかんのだって言うんですけど、女房には、あなたそう言うけど、そのことあの二人に言ってくれたって責められてるんですよ。丁度いいきっかけ

だったはずなんですけどね、結果的には(義母夫婦と) 同じことしてた。」「(義母から) あんたも苦勞するわねって言われて—(中略)—はい、そうですとは言ってないんですけど、無言だったってことは肯定ですよ。」

「(義母から) 大変やなあって言われたときは、大変やねんと思った気持ちも、もちろんありまして。—(中略)—そういう母親と娘の厄介な場面も、初めて見たわけじゃなくて—(中略)—何度も見てて、そのたびに、まあ、そういう話は、もう、しょいきれんので、もう僕の前でやってくれんなよという気持ちが一番あったかなっていう。」「何とかしたいという気持ちも、それもあるのも嘘じゃない話で。ただ、目の前にいてやられちゃうと、そういう、かなわんと思っちゃう気持ちの方が強くて。—(中略)—次にそんな場面に出会ったら、言えるかなあってというのが、やっぱり、情けない、僕自身が。」

**Step 4**：相手を打ち負かすことに固執している自分を洞察

「どういう風な介入の仕方がベターなのか。」「あ、そうか、お義母さん、あんたが間違ってる、なんて話じゃなくて、そんな言い方じゃなくても別にいいわけですね。—(中略)—(妻の) 味方になるとかじゃなくて、この義母をやっつけてやらな、なんともならんのだっていう(思い込みがあった)。」「(意見に賛成しているという意味表示をするのではなく、相手を) やっつけたいと思うときがやっぱりありますね。」

**事例 3**：A 24 氏 (25 歳女性、大学院生)

【枝の変化】 枝の構成が不調和の段階から、より調和した段階へと変化。(図 5, 6)

【発言の変化】 院生同士の競争に悩む自分を訴えていたが、相手に攻撃させて罪悪感を持たせていることに気づき、自分のことを理解してもらう努力を惜しむ自己のパーソナリティの傾向を洞察。

**Step 2**：大学院での人間関係の問題を、競争心の強い院生との関係において検討

「先週、院生の子から電話が入って、なんか今日遅れるから伝えとって—(中略)

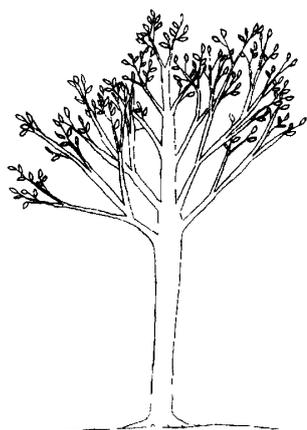


図5 : A24 pre-test

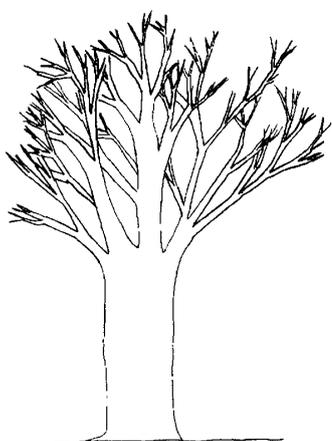


図6 : A24 post-test

—なんのことも分からなくて、何も知らなくて、今日大学でなんかあるのって言ったら—(中略)—いや、たいしたことじゃないとか言っ、教えてくれなかったんですよ。」「大学院はしんどいなって—(中略)—周りに負けてるとい—(中略)—多分(院生同士が)みんなそれぞれ牽制しあってる。競争。で、その、多分前期は探りの時期だったと思うんですけど、怖い。」「研究のことだけじゃなくて—(中略)—何食べたとか—(中略)—台風のとれだけ酷い被害にあったことがあるとか、そんなことですごい本気になって競争してて。」

Step 3 : 母親と同様に、相手に攻撃させて罪悪感を持たせていることに気づく

「私の巻き込まれる相手というのが、私に言いやすい人。—(中略)—それで相手に罪悪感

を持たせて。あの、上回る同じものをもった相手に、やっぱり巻き込まれやすいと思って。」「それは誰かって考えて、母親かなあと。思って。よく罪悪感を持たされた。」「(母親に)怒られて、謝るんですね、で、(母親はそれを)無視するんです。—(中略)—口を利いてくれなくて、謝ってるんですけど(無視する)、しつこく謝ると、お母さんが傷ついたって、そういう言い方するんです。あなたが悪い子やから。」「だから私も同じ—(中略)—いじめさせるように(仕向けて、いじめさせられている状態にしている)。」

Step 4 : 相手に分かってもらおうと努力しない自分を洞察

「(人に)説明するとかいうのは下手、できない。—(中略)—なんかそれを能力の問題と。思ってたんですけど、それだけじゃなくて、分かってもらおうとか、分かるように伝えたりとか(努力していなかったことに気づいた)。」

**事例4 : B2氏 (35歳女性, カウンセラー)**

**【枝の変化】** 枝の構成が、未熟な段階からより成熟した段階へと変化するとともに濃い陰影が消失した。(図7, 8)

**【発言の変化】** 両親や同僚に対して大人として対応できないことを訴えていたが、母親と同様に妹や子ども(長女)に対して威圧的な態度を取っていたことに気づき、相手を支配しようとする自己のパーソナリティの傾向を洞察。

Step 2 : 両親や同僚に対して大人として対応

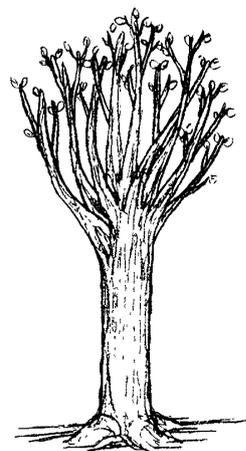


図7 : B2 pre-test

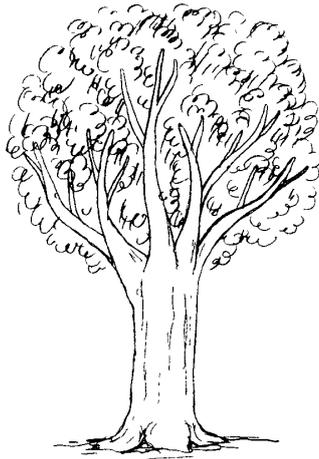


図8：B2 post-test

できないことへの問題意識

「親に対して大人としての対応ができていなかった。」「(年上の同僚に対して)母親転移を起こさないように気をつけていたんですが、兄弟間葛藤っていうのは考えていなかったんです。—(中略)—母に対する競争意識があると思っていたんですけど、競争意識というよりは、母親との同一視があったと。母に取って代わりたいという気持ちがすごく強かったんだなって。父には認められたいって思っていましたし、妹や弟にはさすがお姉ちゃんって言われたらいいという気持ちもありまして、なんか、それはバラバラのものだと(思っていたが)—(中略)—母との関係を中心にまとまった感じがしました。」「(母は)ががっと威圧的に言ったかと思うと、こっちがこう、正しいことを指摘したりすると、お母さんなんか死んでしまうから、体が弱いから先が長くないんやからって—(中略)—私がそんなことないよって言うのを待ってる。—(中略)—そういうやり方でコントロールされてきたっていうのが(理解できてきた)。」「考えてみれば、弟や妹へ攻撃させないように、随分私がかばっていたんです。」

Step 3：母親と同様に、妹や子ども(長女)に威圧的な態度を取っていたことに気づく

「母がいないときに妹を前にして、お姉ちゃんはあんたみたいな妹を持って恥ずかしいって、全く母の真似をして、よく説教していたのを思い出しまして。」「ついこの間、娘に

—(中略)—お母さんポケモンの攻撃は怒り、怒る攻撃っていうのがあって、怒る攻撃が終わった後は、怒った理由を説明攻撃っていうのがあって、その後は飽きた、飽きて立ち去るっていうのが、それが、あの、いやそういうところが確かにあるなって。」

Step 4：相手を支配したいという欲求の強い自分を洞察

「(母親と同じように威圧的に)ががっと言って、(相手を)自分の思い通りにしたいというのがある。」

事例5：B7氏(26歳女性、カウンセラー)

【枝の変化】枝の構成が、未熟な段階から、より分化し、成熟した段階へと変化。(図9, 10)

【発言の変化】対人不信に悩むことと夫への怒りをコントロールできなと訴えていたが、父親と同様に配偶者をケアできていない自分に気

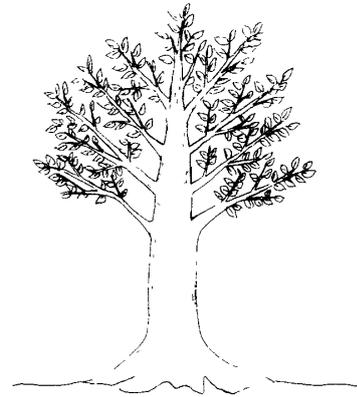


図9：B7 pre-test

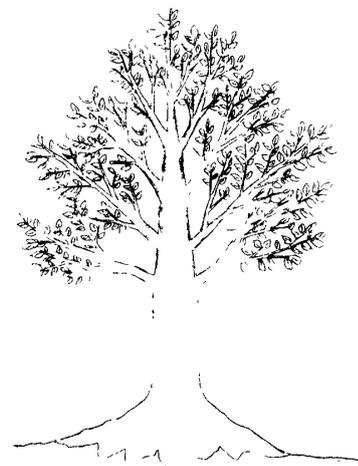


図10：B7 post-test

づき、一方的に受容されたい要求の強い自己のパーソナリティの傾向を洞察。

Step 1：対人不信に対する問題意識

「人に対する不信感が、私自身もすごく強くて。—(中略)—Aさんのお宅に用があって、ちょっとお電話したんですよ。—(中略)—(A氏の状況が悪いときに電話して)出られたAさんの声がすごく不機嫌そうだったんですよ。で、私、その声を聞いて、自分が悪いことしたかなって、そう取ったんですね。—(中略)—(問題が生じたときには)ものすごく自分のことを責めるんですよ。—(中略)—(相手が)協力的でなかったりとか、ずうずうしかったりとか、そういうところが一つでも目に付いたら、もう、なんか、恐ろしいぐらい自分のことを責めて—(中略)—私のことを嫌がってるんじゃないかとか、結局、なんか、見捨てられるんじゃないかとか。なんかどうしても、そんな風に思えてきて。」

Step 2：傷ついていることを見せ付けようとする自分の行動傾向を父親との関係において検討

「結婚して2ヶ月ぐらいの、2ヶ月か3ヶ月ぐらいのときに、あの、うちの主人に対して、すごい怒りまくって。もう何かコントロールできなくなって、このままやったら壊れるんちゃうかって思って。—(中略)—(夫の肩に手をおいたとき)ほっといてと、手を払われて、それですごい頭にきて、で、別の部屋に行って(黙って)怒ってたんですよ。—(中略)—(夫はそれに気づかず)そのまま寝ちゃったんですよ。もう、寝てる姿を見たら、ものすごく腹が立って、なんか仕返ししたくて仕方がなくなって—(中略)—起こしてしまっ—(中略)—私がこんなに傷ついているのに、なんで分かれへんのって感じで。—(中略)—でも(夫に)眠いののに何で起こすんやって(言われた)。—(中略)—また腹が立ってきて—(中略)—こんな冷たい人いらんわって、そのまま飛び出したんですよ。」「私が傷ついているっていうのを見せ付けて、懲らしめてやろうというのが、そういう怒り方なんですよ。」「腹が立つ感覚っていうのが—(中略)—多

分、父親に対するものかなあとってるんですけど。—(中略)—うちの父親っていうのは、叩いて分からさなあかんというふうには、叩いた後、よしよしと抱きしめたらいいんやというふうに(思っている)。—(中略)—父親が子どものときに、祖母が—(中略)—(近所に迷惑かけた父親を)すごく人前で叩いて怒ったらしいんですよ。それで近所の人が、そんな可哀想なことしたりなよって(許してくれた)。—(中略)—人前で子どもを叱るっていうのは、おばあちゃんの作戦だったっていうふうに(父親は)肯定してるんですよ。」「(夫に対して腹が立ったのは)言わなくても分かって欲しいっていうのがあったんです。」

Step 3：父親と同様に、母親をケアしていなかったことに気づく

「自分が(夫に)攻撃してるっていうのが、すごい抵抗感があって、もう、しまったっていうような気持ちだったんですけど。」「(普段は様子を見に来る夫が)私が怒ってるっていうのを見に来ないで、そのまま寝てしまったっていうのをすごく怒ってたんですけど—(中略)—(見にこなかったのは)どう考えても病気だったからっていうことしか思えなくて。」「母親がすぐ病気になって面倒見てくれてっていうような感じで言ってきたり、病気だからっていう理由で私との約束を反故にしたり(していた)。—(中略)—私が病気的时候は、割合、母親がケアしてくれて。—(中略)—父親も私と一緒にほったらかしにするんです。だから、母親は父親にも同じことを、何で大丈夫って言ってくれへんの、あんたら2人は一緒やってというようなことを(言っていた)。」「私は父親と一緒にですね。やり方は父親のやり方を真似して採用していた。—(中略)—母親にはめちゃくちゃ文句言えるんですよ。父親には本当に言えなくて。—(中略)—(父親は)怖い、怒ったらすごい怖い。」

Step 4：一方的に受容されたい欲求の強い自分を洞察

「(参加者であるM氏から拒否されたように感じたことについて) どうしてショックだったかっていうのを考えてたんですけど—(中略)

「幼稚な、それこそ疑いのない、受容してもらえんということに人に期待してらってというのがわかって—(中略)—それって問題やなっというふうに感じました。」

**事例 6 : B13氏 (35歳女性, 高校教師)**

【枝の変化】 枝の構成が、未熟な段階から、より分化し、成熟した段階へと変化。(図11, 12)

【発言の変化】 子ども (長女) や生徒に反抗

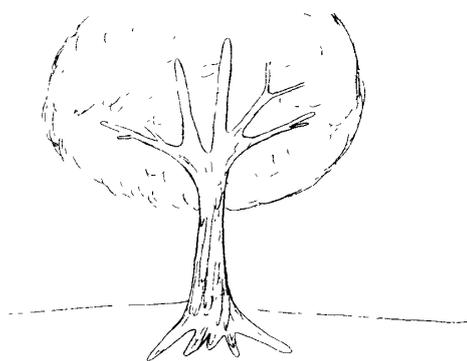


図11 : B13 pre-test

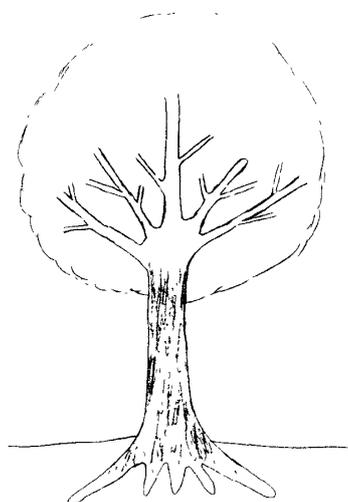


図12 : B13 post-test

されると腹が立つことを訴えていたが、母親と同様に他者に共感できていない自分に気づき、人を出し抜くことに固執している自己のパーソナリティの傾向を洞察。

**Step 2 :** 子ども (長女) や生徒に反抗されると腹が立つてしまうことを、母親との関係において検討

「子ども (長女) のことなんですけど、保育

所には最近、まあ、嫌がらずには行くような感じで。—(中略)—でも、この1週間ほど、(保育所からの連絡) ノートに書いてあるのが、お昼ご飯を—(中略)—嫌がって、泣いて食べないみたいなんです。—(中略)—私も忙しいということで、あの、きちっと食事も作らないで、出来合いのものを出したりとか、外食が多いんで(それが原因の一つかもしれない)。—(中略)—晩御飯の時間に—(中略)—(手を抜かずに) 食べさせていかなあかんのかなっとか、思うんですけど。」「昨日もちょっと、私忙しくて—(中略)—苛々して—(中略)—(子どもを邪魔にしたところ) 子どもがね、私の腕を、ここ、つねったんですよ。思いっきりつねって。で、私、もう、こういう、つねられたら許せない。で、こう、パシーンって殴ってしまったんです。—(中略)—私も母親と一緒にいるとき、母親が自分の都合の悪いようにされると、殴られたり、怒られたりとか、うるさいとか言われてたんですけど、結局、そのへんが(同じことを) やってるんですよ。—(中略)—まだ親を正当化してるようなところがあるんですね。子どもは親の言うこと聞くの当たり前なんや、みたいな。—(中略)—そういう気持ちに自然となっているのか。」「生徒が、やっぱり、うちのクラス、4, 5人がやっぱり反抗的で。私に向けてるんです、親に対する敵意。—(中略)—それもすごい腹が立って、それに対処できてないんですよ。そういうのもあって、余計子ども(長女) に当たってる部分もあるかもしれないですよ。—(中略)—先生、って感じで慕ってくれる子はいいんですけど、こっちがね、あの、声をかけてあげてるのに、反発してきたり、ぞんざいなものの言い方をしてきた奴は許さんっていう(気持ちになる)。—(中略)—基本が一緒ですね。だから生徒であろうが、子ども(長女) であろうが—(中略)—私に疑問を持たば、否定するような態度を取れば、ムカッと来る。

**Step 3 :** 表面は取り繕いながら相手を攻撃していることに気づく

「(表面は取り繕って) 羨ましいですねって(言

いながら) —(中略) —実は攻撃してる(ということがあるのかもしれない)。「(学校で)盗みがあったりしたんですね。(生徒が)私の発言にもものすごく過敏に反応して、えらい怒ったことがある。—(中略) —(生徒が)私を疑ってるんやろうって(怒った)。—(中略) —私はやっぱり、すごい、自分がものすごい被害感持ってるから、自分にね、だから人の痛みが分からないんです。—(中略) —だから、すごい嫉妬深いし、(人を)羨ましく思う。—(中略) —だけれども、(表面は取り繕って)きれいな自分でっていう、その、やっぱり二面性があるって、で、私が苦手とする生徒は、私の裏の部分に気づいてて—(中略) —見抜いてる。」「親は学級委員になったりとか、成績がよければ、ものすごく認めてくれたし—(中略) —先生にも、まあ、認められるし、で、6年生ぐらいまでは、それで何か満足していて。—(中略) —で、中学に入る前に、ちょっと不安な状態に(なった)。—(中略) —勉強が支えだったんですけど—(中略) —友達ライバルで、それはもう、(自分を)守ろうとして。でも、今から思うと、だから、不安になったんかなと思うんですよ。—(中略) —人はライバルで、色気に走ったらあかん、お洒落をしちゃいかんとかね、ものすごく固執してたんで。—(中略) —目上の人、先生だとか、親だとか、から、誉められるっていうのを得ようとして。—(中略) —無意識の部分で、自分が優秀で、一人、なんか偉いみたいな。主人とも、やっぱりライバル意識みたいなもの持ってて。学校では特に、やっぱり、校長、教頭に気に入られたっていう部分がすごく強いから。」「(今、担当している学科は脚光を浴びているので)遣り甲斐のある仕事なんですよ。—(中略) —名誉と感じてたので。だけど、ちょっと、実際は思うように(仕事)ができていない。子育てもありますし。—(中略) —じゃあ、校長とか教頭に、できませんと言えばいいんでしょうけれども、やっぱり、こう、仕事来ると、やらざるを得ないとか。—(中略) —校長、教頭に偉いねって(評価されると) —(中略) —嬉しいんです

ね。ものすごく快感なんです。で、他の人が、やっかんでるなあって、よく分かるんですけど、もう、快感なんです。」「うちの父親にはよく、ここまでやなあって、よく言われました。—(中略) —6年生のときに、そろばんの検定試験で—(中略) —(父親が)すごい期待してたんですけど、私が落ちて、近所の女の子が通ったってことで、随分怒られて。もうお前はここまでやなあ、みたいな感じで言われたことがある。—(中略) —ものすごく強い口調で—(中略) —調子のいいことを言っといって、お前にはがっかりやって。—(中略) —その時に死のうかなと思った。—(中略) —(この話をしても)なんていうか、そんなに盛り上がりがないっていう感じで、冷めてくる。」

Step 4: 相手を出し抜くことに固執し、共感できない自分を洞察

「Iさん(参加者)、一生懸命頑張っておられますよね。—(中略) —私駄目なんです、なんでかな(一生懸命になっている人に対して)冷めてしまうんですよ。—(中略) —聞けないですね。—(中略) —(逆に自分がそういう対応をされたなら)ショックですね。—(中略) —(母親に見捨てられたことを思い出して)ショックすぎて涙も出てこないし、感情も湧きあがって来ない。」「(母親の投げたハサミでアキレス腱を切って)手術も痛かったです。麻酔効かなかったし。その時はお母ちゃん、一生懸命立ち合ったんですけど、その後、(病院に)来ないんですよ。拳句の果てには、自分が神経症になったとか、辛かったとか言って(祖母の家で寝込んでしまった)。そこが受け止められないんです。そういう親だったって言うても、冷めてくるんです。—(中略) —酷い親ですよ、(子どもを)ケアできない親なんですって言うても、冷めてくるんです。—(中略) —感情がついてこない。」「だから親を攻撃できないんです。親が頼りないから。あ、そこなんです。親が頼りないとか思えないんです。自分がしっかりしてないから、親がそうなる。怒られたときでも、親のせいにはできない。—(中略) —そこが責め

切れないっていうか、親の本当の姿が見れないとこですよ。」「子どものときの（親に対する）過剰な期待を、今だに持ちつづけてるっていうのが（問題）。やっぱりだから、復讐ですよ。許さへん。絶対許さへん。そういうのを繰り返して、繰り返してやってきたんで、身につっちゃってるんですよ。—(中略)—(人を)出し抜くことで親に満たされなかったことの代償を（得ようとしていた）。」

### 考 察

本研究では、グループ・カウンセリング前に比してグループ・カウンセリング後の投影樹木画法の枝に顕著な成長的变化が見られた場合、カウンセリング場面において洞察的発言がみられるとする仮説を立て、それを検証することによって、投影樹木画法の枝の変化がカウンセリングの効果指標として有効であるということについて検討した。対象とした47名のうち、樹木画の枝とセッションでの発言のいずれかに顕著な変化が見られたのは10名であるが、このうち枝と発言の両者に顕著な変化がみられたのは6名であった。それぞれの事例について詳細に検討した結果、いずれも自己のパーソナリティに対する新たな認識が生じていると考えられ、枝の変化が洞察を反映していると推測されることから、仮説は指示される方向にあるといえる。

樹木は古くから生命や成長、発達の象徴として親しまれてきたものであり、根にはじまり、幹から成長し、上方、左右、さらには前後へと伸びる樹木の成長は、人間の身体や自我の自然な発達の方向に重なるものと考えられてきた（Koch 1949, Burns 1987）。Groth-Marnat（1997）によれば、健康な樹木画は豊かで全体性があり調和よく描かれ、枝は上へ外へと滑らかな広がりを持ち、また、新しい小さな枝は新しい人格の成長を表すという。つまり、より豊かに、より滑らかに変化することが成長的变化であるといえよう。もちろん、このような変化は一義的なものではなく、その成長の力動との関連を完全に記述することは不可能であるとも言える。しかし、本研究で検討された枝の成長

的变化を分析してみると、いわゆる枝ぶりがよくなったと言われるような枝の構造上の成長的变化、すなわち枝の成熟が観察された。筆者らはこれを①量的変化、つまり、枝の構造的拡大と、②質的变化、つまり、枝の構造的調和の向上の2つの方向に分類した(表4)。平たく言えば、枝が大きくなって調和がとれ、見栄えがよくなることである。すなわち、枝の成長的变化として、枝の成熟度が問われるということになる。

検討した6事例のうち、枝の構造的拡大へと変化が見られたものは5事例であり、少なくともStep 4に至った場合、枝の量的な変化が起こりやすいのではないかと考えられる。成人の平均的な樹木画には、通常、二次元枝による枝の構成や適度な陰影が見られ、左右対称にバランスよく描かれる（Buck 1948）とされており、調和よく描かれた枝がさらに成長拡大するため、分枝したり枝振りが広がったりという量的な変化が起こりやすくなるものと思われる。（表5）

しかしながら他の樹木画を検討してみると、必ずしも量的変化が優位とはいえない。その変化は個別的であり、成長とともに後退と見られる変化が同時に生じている場合もある。枝の変化が《+》評価であった樹木画23事例を検討してみると、例えば、枝の構成のバランスは改善したが紙面からはみ出したもの、一次元枝から二次元枝に量的変化したが枝の構成がアンバランスになったもの、枝の構成は調和したものへと変化したが濃い陰影が現われたものなど、枝の成熟度に問題が見られる。これらの発言の変化はStep 1からStep 4にかけて幅があり、先に述べたように、指標化するには枝の成熟尺度に関してさらに詳細な検討が必要である。Jersild（1955）は、自己探求の過程は苦痛に満ちているものであり、しばしば欲求不満や抑うつ的な感情に直面すると述べているように、枝の変化が《+》評価であったにもかかわらず、それらの事例に見られる発言の変化、すなわちStep 1からStep 4へとばらつきのある個別性は、いわばこのような個人の内面の複雑な変化とプロセスを反映しているものと考えられる。

また、Step 4までの変化が見られたにもかか

ならず、枝の変化が《+》レベルであったものが1事例(A1)、さらに《±》レベルであったものが1事例(A11)見られた。それぞれについて詳細に検討したところ、A1は高校の美術の教師、A11はカウンセラー歴6年の臨床心理士であり、いずれも他の被検者と職業や経歴に差があることが分かった。たとえば、Bolander (1977)は、樹木画がその個人の美術的素養や知的レベルに影響されるという問題点を指摘しており、判定を行う前に、被検者の職業や経歴、知能水準などの情報を得ることが望ましいと述べているが、これについてはCantlay (1996)も、子どもの描画表現力に及ぼす絵画技術訓練の影響を考慮すべきと警告していることも考え合わせると、今後、慎重な検討が必要であろう。

上述とは逆に、樹木画の枝に顕著な成長的变化が認められたにもかかわらず、発言にStep 4までの変化が認められなかったものが2事例(A13, B14)見られた。それぞれの発言を検討したところ、いずれも研究対象とするグループ・カウンセリングに参加するまでの経緯についての報告であり、特に対人関係の改善に対する努力の成果についての報告であった。この場合、グループ・カウンセリング参加以前の社会的、職業的、家庭的場面における対人関係や、それにかかわる内的な体験を公表し、報告するという、いわゆる公言化(profession)をどのように評価すべきかということが問題になる。筆者らが構成したSTEP 4によってとらえ得るプロセスは、あくまでカウンセリング場面における発言の変化に限っており、もちろんその適用の範囲や尺度化の心理的次元については限界がある。このことを考慮した上で、枝とSTEP 4との不整合な関連について本研究結果から推察するならば、枝に顕著な成長的变化が見られた場合、STEP 4に必ずしも合致しなくとも、参加者個人にとって意味のある深い洞察が生じている可能性が示唆されているものと思われる。さらに言うならば、このことは同様に、参加者にグループ・セッション場面で全く発言がない場合であっても、枝に顕著な成長的变化が見られるならば、その個人の内面においてはStep 4に相当する変化が生じている可能性がある

考えられる。この意味で、樹木画がとらえとされる深層の心理的次元と、グループ・セッション場面における参加者の意識的次元性の高い言語表現との整合性のある関連性を見出すには、個人療法における事例研究とリンクさせた樹木画とSTEP 4の関係についての、さらに詳細な研究が必要である。

本研究では、投影樹木画法における枝の変化がカウンセリングの効果指標として有効であるとする筆者らの仮説(大辻・村井 2003)を、STEP 4を導入することによって、さらに実証的に検討したが、心理療法の効果に関する研究については、わが国では臨床事例研究が主流となっており、アメリカを中心とする心理療法の効果研究が評価の客観性と因果推論の妥当性を追及してきたこととは対照的であるといわれている(南風原 1997)。個人の内的、主観的世界に参加する臨床家の専門性を追究するならば、その実践と成果を第三者に伝達可能な客観性を有した研究として、常に公に呈していくことが求められるだろう。しかしながら実際問題として効果を検証することは、クライアントを対象化し、そのプロセスに介入することになる。その際に実施される検査にはクライアントに対して負担となるものが多く、負の要因が憂慮されてきた(小谷 1997)。その点、樹木画法は被検者への負担度も軽く、比較的意識的歪曲性の少ない投影検査である。実施においては、簡便かつ敏感にクライアントの人格の変化をとらえ得る特質を持っており、統合的に指標化されている(大辻 2002)点など、優れた測定道具であるといえよう。もちろん樹木画だけで治療過程を全て把握するには限界があることは論を待たないが、しかし、カウンセラーの自己点検、特に初心のカウンセラーのトレーニングには有効な評価道具として機能するのではないかと思われる。

#### 注

投影樹木画法の教示については、本研究では方法的にBuck法(1948, 1966)の系列下にあるBolander(1977)の「木を一本描いてください(Would you

please draw a tree for me?)」を教示として用いたか、わか国では Koch 法「実のなる木を一本描いてください (Draw a fruit tree Zeichne einen Obstbaum)」(1949) を用いることが多い。しかし、樹木画法において実のなる木を強制的に描かせることについては、Cantlay (1996)、Bolander (1977) および高橋 (1994) らが、投影法における自由度に関する問題を指摘している。さらに大辻ら (2000) は、Koch 法による教示が実の描画を誘導し、実に関する象徴解釈にまつわる問題を生じさせていると主張している。これについては、樹木法の教示に関する実証的な発達研究や詳細な事例研究にもとづく臨床的研究がさらに必要とされるものと思われる。

## 文 献

- 1) Anastasi, A. (1976) Psychological Testing (4th ed) New York : Macmillan
- 2) Bolander, K (1977) Assessing Personality through Tree Drawings New York : Basic Books (高橋依子訳 1999 樹木画によるパーソナリティの理解 ナカニシヤ)
- 3) Buck, J N (1948) The H-T-P Technique A Qualitative and Quantitative Scoring Manual. Journal of Clinical Psychology, MONOGRAPH SUPPLEMENT No 5 (加藤孝正・荻野恒一訳 1982 HTP 診断法 新曜社)
- 4) Buck, J. N (1966) The House-Tree-Person Technique Revised Manual Los Angels . Western Psychological Services
- 5) Burns, R C (1982) Self-Growth in Families, Kinetic Family Drawings (KFD) : Research and Application New York . Brunner/Mazel
- 6) Burns, R C (1987) Kinetic House-Tree-Person Drawings (KHTP) New York Brunner/Mazel (伊集院清一他訳 1997 動的 HTP 診断法 星和書店)
- 7) Burns, R. C (1990) Family-Centered Circle Drawings. New York Brunner/Mazel. (加藤孝正・江口昇勇訳 1991 円枠家族画法入門 金剛出版)
- 8) Cantlay, L. (1996) Detecting Child Abuse : Recognizing Children at Risk Through Drawings Santa Barbara, CA . Holly Press (大辻隆夫抄訳 2001 描画分析技法 京都女子大学家政学部児童学研究第31号)
- 9) Di Leo, J H (1973) Children's Drawings as Diagnostic Aids New York : Brunner/Mazel.
- 10) Freud, S (1924) A General Introduction to Psychoanalysis New York : Boni & Liveright (懸川克躬・高橋義孝訳 1971 精神分析入門 人文書院)
- 11) Greenson, R R (1967) The Technique and Practice of Psychoanalysis (Vol1). New York International Universities Press, Inc
- 12) Goodenough, F (1926) Measurement of Intelligence by Drawings New York World Book Company
- 13) Groth-Marnat, G (1984) Handbook of Psychological Assessment (1st ed). New York . John Wiley & Sons
- 14) Groth-Marnat, G (1990) Handbook of Psychological Assessment (2nd ed.) New York . John Wiley & Sons.
- 15) Groth-Marnat, G. (1997) Handbook of Psychological Assessment (3rd ed.) New York . John Wiley & Sons
- 16) Groth-Marnat, G & Roberts, L. (1998) Human Figure Drawings and House Tree Person Drawings as Indicators of Self-Esteem A Quantitative Approach Journal of Clinical Psychology, 54(2), 219-222
- 17) 南風原朝和 (1997) メタ分析による精神療法の効果研究の統合 精神療法 23(2) 131-136.
- 18) Hammer, E F (1958) The Clinical Application of Projective Drawings. Springfield, IL . Charles C. Thomas.
- 19) Harris, D. B (1963) Children's Drawings as Measures of Intellectual Maturity. New York . Harcourt, Brace & World
- 20) Horney, K (1942) Self-Analysis New York . W. W Norton & Company, Inc. (霜川静志・國分康孝訳 1961 自己分析 誠信書房)
- 21) Horney, K (1950) Neurosis and Human Growth New York : W W Norton & Company, Inc (榎本讓・丹治竜郎訳 1998 神経症と人間の成長 ホーナイ全集 6 誠信書房)
- 22) 林勝造 (1994) バウムテスト論考 臨床描画研究IX 金剛出版 3-18.
- 23) 岩井寛 編著 (1981) 描画による心の診断 日本文化科学社
- 24) Jersild, A. T. (1955) When Teachers Face Themselves. Teachers College Press, Columbia University (船岡三郎訳 1975 自己を見つめる・不安の解決と共感)
- 25) Karp, M R (1997) Symbolic Participation . The Role of Projective Drawings in a Case of Child Abuse. The Psychoanalytic Study of the Child, vol 52, 260-300.
- 26) Kaufman, B. & Wohl, A (1985) Silent Screams and Hidden Cries : An Interpretation of Artwork by Children from Violent Homes New York . Brunner/Mazel.
- 27) Kaufman, B & Wohl, A (1992) Casualties of Childhood . A Developmental Perspective on Sexual Abuse Using Projective Drawings New York : Brunner/Mazel
- 28) Koch, C (1952) THE TREE TEST . THE TREE DRAWING TEST AS AN AID IN PSYCHODIAGNOSS New York . Grune & Stratton (林勝造他訳 1970 バウム・テスト 樹木画による人格診断法 日本文化科学社)
- 29) Koch, K (1949) DER BAUM-TEST . DER BAUM-ZEICHENVERSUCH ALS

- PSYCHODIAGNOSTISCHES HILFSMITTEL, ERSTE AUFLAGE, BERN : HANS HUBER.
- 30) 小谷英文 (1990) 集団心理療法 臨床心理体系7 心理療法(1) 小此木啓吾他 (編) 金子書房 240-269.
- 31) 小谷英文 (1997) 集団精神療法の効果と評価に関する諸問題 精神療法 23(2) 145-148.
- 32) Langs, S. R. (1981) *The Technique of Psychoanalytic Psychotherapy* (vol. 1). NJ : Jason Aronson Inc.
- 33) Levine, M & Galanter, E. H. (1953) A note on the "Tree and Trauma" Interpretation in the HTP. *Journal of Consulting Psychology*, 17, 74-75.
- 34) Lyons, J. (1955) The Scar on the H-T-P Tree. *Journal of Clinical Psychology*, 11, 267-270.
- 35) Machover, K. (1949) *Personality Projection in the Drawings of Human Figure*. Springfield, IL : Charles C. Thomas. (深田尚彦訳 1974 人物画への性格投影 黎明書房)
- 36) Malchiodi, C. A. (1990) *Breaking the Silence : Art Therapy with Children from Violent Homes*. New York : Brunner/Mazel.
- 37) Malchiodi, C. A. (1998) *Understanding Children's Drawings*. London : Jessica Kingsley Publishers.
- 38) Ogdon, D. (1977) *Psycho diagnostics and Personality Assessment : A Handbook*. Los Angeles : Western Psychological Services.
- 39) Oster, G. D. & Gould, P. (1987) *Using Drawings in Assessment and Therapy : A Guide for Mental Health Professionals*. New York : Brunner/Mazel. (大辻隆夫抄訳 1999 樹木画 : The Tree 京都女子大学家政学部 児童学研究第29号)
- 40) Oster, G. D. & Montgomery, S. S. (1996) *Clinical Uses of Drawings*. Northvale, NJ : Jason Aronson Inc.
- 41) 大辻隆夫 (2002) 投影樹木画法におけるトラウマ指標の統合化とそれを巡る2, 3の問題 京都女子大学家政学部 児童学研究第32号
- 42) 大辻隆夫・塩川真理・田中野枝 (2000) 投影樹木画法における実の描画に関する教示法の違いについて日本精神衛生学会第16回大会抄録集
- 43) 大辻隆夫・村井佳比子 (1998) カウンセリングの効果指標としてのバウム・テストの枝の変化について日本精神衛生学会第14回大会抄録集
- 44) 大辻隆夫・村井佳比子 (2003) カウンセリングの効果指標としての投影樹木画法における枝の変化について ころの健康 Vol. 18 No. 1
- 45) Koppiz, E. M. (1982) *Personality Assessment in the Schools*. Reynolds, C. R. & Gutkin, T. B. (Ed.), *The Handbook of School Psychology*. New York : John Wiley & Sons.
- 46) Plotnik, R. (2001) *Introduction to Psychology* (6th. ed.). Brooks/Cole Publishing company.
- 47) Plotnic, R. (1998) *Introduction to Psychology* (5th. ed.). Brooks/Cole Publishing company.
- 48) Rapaport, D., Gill, M. M. & Schafer, J. (1968) *Diagnostic Psychological Testing* (Vol. 1) (Rev. ed.) . Chicago : Year Book Publisher.
- 49) Rogers, C. R. (1954) *Psychotherapy and Personality Change*. Chicago University Press. (友田不二男編訳 1967 パーソナリティの変化 ロージャズ全集13 岩崎学術出版社)
- 50) 高橋雅春 (1974) 描画テスト入門 文教書院
- 51) 高橋雅春 (1994) HTP テストにおける樹木画 臨床描画研究IX 金剛出版 60-72.
- 52) Torem, M. S., Gilbertson, A. & Light, V. (1990) Indications of physical, sexual, and verbal victimization in projective tree drawings. *Journal of Clinical Psychology*, 46(6), 900-906.

表4：枝の成長的变化

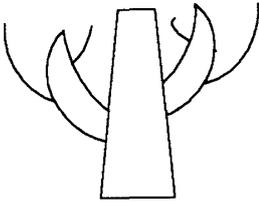
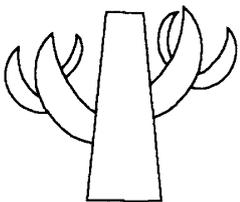
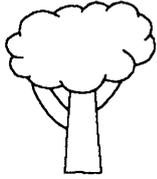
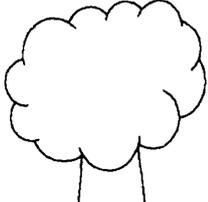
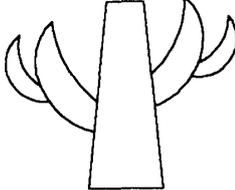
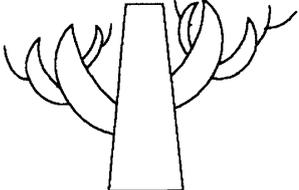
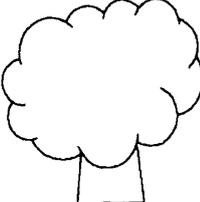
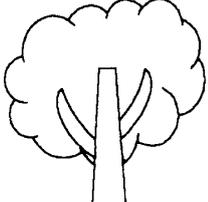
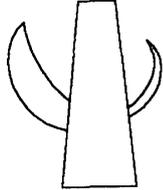
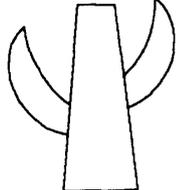
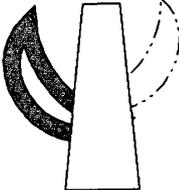
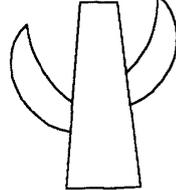
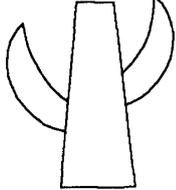
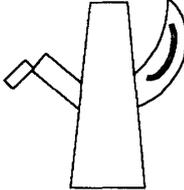
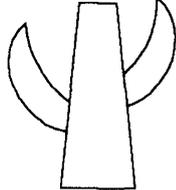
		変化前	変化後
量的 変 化	一次元枝から二次元枝への変化		
	用紙の使用量の変化		
	より複雑な枝の構成への変化		
			
質的 変 化	左右のバランスの改善		
	過度に強調された描線あるいは不規則な描線から自然な描線への変化		
	トラウマの指標の消失		
			

表5：対象事例のSTEP 4

		発言	樹木画
Step 1	自己の問題の認識 自己の所有する	A 4 「期限を（守れないことが）前から—あったんです」 B 7 「人に対する不信感が、私自身、すごく強くて」	A 4  B 7 
Step 2	自己の問題の認識 重要な他者との関係にまつわる	A 4 「（提出期限に遅れたのは）やる気がないんじゃないくて、（指導者に）やってもらいたい（気持ちがあったから）」 A 17 「僕の役割として（義母から）女房をかばってやらなきゃいけないのに、できてないんですね」 A 24 「大学院はしんどいなって—（院生同士が）牽制し合ってる」 B 2 「親に対して大人としての対応ができていない」 B 7 「主人に対して、すごい怒りまくって、もう何か、コントロールできなくなって」 B 13 「（母親と同様に）生徒であろうが、子どもであろうが、私に疑問を持てば、否定するような態度を取れば、ムカッとくる」	A 17  A 24  B 2  B 13 
Step 3	自己内部の矛盾の認識 重要な他者との関係にまつわる	A 4 「（指導者から勧められて提出したが）うまく書けんからやっぱりやめようと思って」 A 17 「（黙っていたということは、義母を正しいと）認めたことになるんでしょかね」 A 24 「（母親に）よく罪悪感を持たされた—だから私も同じ—いじめさせるように（仕向けている）」 B 2 「（母の真似をして妹に）よく説教していたのを思い出した」 B 7 「私が病気的时候は母親がケアしてくれて（でも、母親が病気的时候は父親と同様、知らん顔していた）私は父親と一緒にですね」 B 13 「羨ましいですねって（言いながら）—実は攻撃してる（かもしれない）—無意識の部分で、自分が優秀で（あると思っている、だから夫にも）ライバル意識みたいなもの持ってる」	
Step 4	自己のパーソナリティの傾向に関する新たな認識	A 4 「（文章をまとめられない原因は）性格分析うんぬんの問題では限界やなって（知的な能力の問題もある）」 A 17 「（賛成しているという意思表示をするのではなく、相手を）やっつけたいと思うときが、やっぱりありますね」 A 24 「分かってもらおうとか、分かるように伝えたりとか（努力していなかった）」 B 2 「（母親と同様に威圧的に）ががって言って、（相手を）自分の思い通りにしたいというのがある」 B 7 「受容してもらえんということに人に期待しているというのがわかった」 B 13 「（一生懸命になっている人に対して）冷めてしまうんですよ—（人）を出し抜くことで親に満たされなかったことの代償を（得ようとしていた）」	A 4  A 17  A 24  B 2  B 7  B 13 